

# 鮎川信夫と『新領土』(その1)<sup>1</sup>

中 井 農

## 1. 『新領土』創刊とその時代 行動主義文学、青年論、そしてシンセリティ

『新領土』は1937年(昭和12年)5月に創刊された。西脇順三郎の影響とともに春山行夫を強力な推進役とする詩におけるモダニズム運動の大きな流れは、1928年9月創刊の『詩と詩論』からはじまり、それを改題した『文學』の終刊の1933年12月までをひとつの区切りとし、この流れを継承するものを、1934年8月に創刊された『詩法』と見ることが妥当であろう。多くが『詩と詩論』系の詩人たちであったが、ここに新たに参加した若い世代の詩人たちが、同時に、同年12月、“僕等には同時代が必要である”<sup>2</sup>と宣言して、『20世紀』を創刊した。『詩法』は1935年9月、ついで、『20世紀』は翌1936年12月に終刊となる。これら二つの詩誌の詩人たちが『新領土』に合流したのである。

創刊号の「後記」の冒頭に、饒<sup>じょう</sup>正太郎は記す。かれは、“グループ二十世紀”<sup>3</sup>のひとりであった。

「新領土」といふ名の意味は、土地を奪ふといふ意味ではなく、新しく開拓するといふ意味で、その點ナショナリズムではなく、極めて國際主義を標榜してゐる譯です。國際的に文學、文化の基準、動向を知るとは、所謂日本主義文學、文化の正體を知るにも都合がよいし、懷古主義又は復古主義のディレッタントの正體を知るにも都合がよい。われわれは單に知識の收拾者ではない。環境を改造し、修正するシンセリテを持つことは、われわればかりではなく、今日では凡ての知識階級に必要

「言語文化」2-4 : 491 - 532ページ 2000.  
同志社大学言語文化学会 ©中井 農

なのである。第一號はすでに『新領土』の新しい出発を正確に約束してゐる<sup>4</sup>。

“新領土”とは、“土地を奪ふ”ことではなく、“新しく開拓する”ことを意味する。巧妙な語り口である。饒は、1931年9月の満州事変以降の、わが国の領土政策に眼を配りながら、“環境を改造し、修正する”ことの必要性を説くのである。“環境”は、“社会”あるいは“政治”と同義であった。

饒の記述の背後に、1935年3月創刊の『日本浪漫派』に象徴されるような、“懐古主義又は復古主義のディレッタント”<sup>5</sup>が文芸界の一翼を担う状況が思い込まれよう。他方、1935年2月に創刊された『世界文化』は、全体主義あるいはファシズムへ向かおうとする論壇に対抗<sup>6</sup>しようとしていた。“ナショナルリズム”を克服するために“國際的に文學、文化の基準、動向を知ること”が必要とされる所以である。

『新領土』という表題が、W・H・オーデンたちの詩と詩論を収めた『ニュー・カントリー』の名称を響かせていた<sup>7</sup>ことは周知のところである。かれらの立場に照らしていえば、“開拓”とは新しい社会を拓くことであり、関心は Kommunismus にあった。マイケル・ロバーツの編纂になるこの書が出版されたのが、1933年3月。ただし、それは、わが国では瀧川事件と佐野・鍋山の“転向声明”の年であり、ドイツではヒトラー内閣が成立した年である。

『ニュー・カントリー』がわが国で注目されるようになった1933年、時代はすでに、積極的な文脈で Kommunismus を語ることはできなくなっていた。それにかわる用語として論壇に登場したのが、ラモン・フェルナンデスが提唱する“行動的ヒューマニズム”<sup>8</sup>にもとづく、“知識階級”の“行動主義”であり、また“行動主義文学”であった。1936年8月、『世界文藝大辭典』に小松清が担当した「行動主義文學」によれば、わが国では“一九三四年の秋ごろから、知識階級の能動性を説いた文學運動即ち能動精神の運動と結びついて發展して來た”<sup>9</sup>のであった。文壇におけるその具体的な現れが、1933年10月創刊の雑誌『行動』<sup>10</sup>、これを継承する1936年6月創刊の『行動文學』<sup>11</sup>である。刊行が遅れがちであった『行動文學』が終刊となるのは、NRF に

アンドレ・ジイドの『ソヴェト旅行記』が掲載された翌月、1936年12月であり、『20世紀』の終刊と同じ月である。

イギリス文学についていえば、1930年1月にT・S・エリオットが主宰する『クライテリオン』に登場したオーデン<sup>12</sup>を中心とする“オーデン・グループ”をニュー・カンントリー派と同義<sup>13</sup>とし、さらに、わが国ではこれを行動主義文学の系譜に含めることができる。『ニュー・カンントリー』が刊行された1933年は、エリオット研究のみならず英文学研究の高揚期を迎えていた。福原麟太郎の回想によれば、このころ“昭和七八年頃には、その年の新刊をその年に読むのでなければ、日本国内の常識にさへ後れを取るやうになつてゐた”し、1934年には、新しいイギリスの動向に敏感な研究者のあいだで、もうエリオットでもなかりとうという雰囲気すら生まれていた<sup>14</sup>。その動向のひとつが、オーデン・グループに代表される政治性を特徴とする動向、すなわち、わが国の用語に翻案していえば行動主義文学であった。たとえば、1936年9月に創刊された英文学研究誌『主流』は、「英吉利行動文學特輯」<sup>15</sup>であった。饒は、この行動主義文学の立場と無縁ではなかった<sup>16</sup>のである。

創刊号の「後記」の冒頭に置かれた饒の記述から、『20世紀』から『新領土』へひきつがれた行動主義文学の立場を確認することができる。ただし、“環境を改造し、修正する”ことへ向けられる饒の“シンセリテ”を、ただちに共通のマニフェストとして受け取ることはできない。注目すべきは、村野四郎がおなじ「後記」に“かつて『詩法』によつて既に必要な純化作用を経た、有力な新しい詩人達によつて、如何なる世界がこの『新領土』の上に建設されるか”<sup>17</sup>に注目してほしい、と記すように、『新領土』は『詩法』を継承するものとして位置づけられているのだ。

後年、1952年の村野の記述によれば、『詩法』は『詩と詩論』『文學』以来の詩人たちが“核となった”ものであり、饒正太郎を含む“次代のチャンピオンを輩出”しつつ、『詩と詩論』の“純粹詩の運動を續行”させた。そして、“『詩法』のエコオル”を引き継ぎ、春山行夫、近藤東、そして村野の“三人の共編集”によつて『新領土』が発刊<sup>18</sup>された、とされる。奇妙なことに、村野のこの記述にも、『20世紀』の存在は意識されていない<sup>19</sup>のだ。饒は『新領土』創刊号に『20世紀』からの連作「青年の計畫」を連載するが、

「後記」にかれの名前が登場するのは次号まで、すなわち二回のみ<sup>20</sup>である。

『新領土』には創刊当初から、“僕等には同時代が必要である”とする若い世代の詩人たちと、“純粹詩の運動を續行”しようとする村野たち中堅詩人とのあいだに微妙なずれがあったことは否めない。しかしながら、その向かうべき“領土”がいかなるものかはともかく、“新しい出發”は、基本的には了とされていた。

編輯者兼発行者である上田保は「後記」に、注意深く、こう記した。

詩が轉換期にあることは確かである。それと同時に詩が困難となりつつあることもまた事實である。かかる冷酷な時期に直面して、われわれは詩の本質と價值とに不斷の批判を向け、詩の歴史の絢爛たる開花を求めねばならない<sup>21</sup>。

春山行夫が願うのは、詩人のシンセリティである。“詩人の中には、片々たる詩の雑誌にホソボソと詩を書くことだけで満足してそれで生涯を終らうと考へてゐるやうな消極的なセンチメンタリストも少くない”が、

僕は『新領土』がさういふ頼りない詩人達を安心させる雑誌であつて貰ひたくない。二十歳に入つた詩人と、二十歳を終らうとしてゐる詩人と、われわれのやうに三十歳の半ばを超えた詩人とは、その年齢から云つても一様にはいへない。唯、それぞれの年齢的段階にある詩人が、その段階にふさはしいシンセリティを把握してゐるかどうか肝要であると思ふ<sup>22</sup>。

春山は“それぞれの年齢的段階”すなわち異なる世代のあいだに、シンセリティを共有したいと願う。

春山とおなじく“三十歳の半ばを超えた”村野四郎もまた、若い世代を意識していた。

われわれの詩壇は、幼年期から直ら(マ)に老年期につながり最も創造

的な壯年期を喪失した。そして現今の詩は、新しいゼネレ・シヨンの要求に對して何らの意味をも持たなかつた。われわれは何より先づ不潔でエクセントリックな世界に居居る古い美學を追ひ出さなければならない。

エリオットが直前の世代を否定して登場したように、若い世代は新しい感性による表現を求めていた。それは、欧州大戦を挟む、前後の時代と状況の相違と呼応していた。わが国の詩壇においては、春山が編輯にあたり西脇の影響のもとにあった『詩と詩論』のエスプリ・ヌボーであり、ひろくこれをモダニズムと呼んでいい。それは、大まかにいえば、萩原朔太郎に代表される抒情詩への反抗であった。村野が“われわれの詩壇は、幼年期から直ちに老年期につながり最も創造的な壯年期を喪失した”というのは、まさにその意味であった。

村野のいう“新しいゼネレ・シヨン”は詩人に限定されているが、当時の論壇を背景とすれば、その“青年論”と響きあうところがある。

もちろん、世代の問題は永遠のテーマである。だが、わが国にあっては、満州事変を前後して、青年すなわち若い世代の問題は、知識人あるいは知識人の予備軍としての学生の問題として浮上した。1931年に文部省に設置された「學生思想問題調査會」に對して、“調査すべき思想問題の性質を可及的明白にすること”が提言されたが、もちろん、“現代の學生思想問題とは、渺からざる學生が左傾思想を持つことが、社會生活に對して重大な關心の問題だと云ふこと”であり、“その所謂左傾思想とは何を意味するかと云ふに、要するに所謂マルキシズムの思想を指す”<sup>23</sup>のものであった。しかしながら、大まかには1933年を境として、文部省の危惧は政治的な力によって解消されたといっている。

ただし、『新領土』創刊の前年、1936年は、2・26事件の年であった。その6月、三木清のこたばを借りれば、“青年學徒にも、青年藝術家にも”共通する青年の問題がとくに“青年將校や青年官吏の問題として特に表面に現はれて”きたのである。“今日のいはゆる青年にとつて、從來の知的文化の遺産のほかに、「特に新たに加はつて來た知的事實」といふのは、マルクス主義

であり、更に最近のファシズムである。(小略)この世代は自己の運命として資本主義の矛盾に最も甚だしく悩まされ、この矛盾を社会的にも思想的にも何等かの仕方 で解決することを自己の問題として與へられてゐる”のである。だが、“社会的不安と文化的混亂と、一切の物が動揺する速度は、彼等にとつて成熟することを不可能ならしめてゐる”<sup>24</sup>のだ。

さらに、『新領土』創刊と同じ1937年5月、同じく三木によれば、“近年慣用される言葉の一つ”に“事變後の學生”といふ言葉”があり、その背後には、満州事變を境として“高等の學校へ入つた學生”が“いはば一つの「世代」を形作り、一定の特徴によつて以前の世代から區別される”のである。“この世代の形成には満州事變、その後における日本の社会的並びに政治的情勢、國家の文化政策、特に教育政策が重要な影響を及ぼして”おり、かれら“學生の知能の低下は彼等に社会的關心が少なくなつたことに關係してゐる。社会的關心が盛んであれば研究心も盛んになつてくることは嘗てのマルクス主義時代の學生が證してゐる。しかるに今日の日本主義的學生は概して頭腦も悪く、また勉強しないと云はれてゐる。これに反して頭腦の善い學生は功利主義的となり、社会的關心を失つてゐる”のである。この状況での學生の“知能の低下の最も大きな原因をなしてゐる批判精神の缺乏の原因が今日の學校において研究の自由が束縛されてゐること”にある。三木はいう。“私は今日の大多數の學生がファシズム的教育に内心から同意してゐるものとは考へない。不幸なことは、彼等は自分で内心思つてゐることと公に云ふこととを別にせねばならぬといふことである”<sup>25</sup>と。

上田が創刊号の「後記」にいう詩の“轉換期”は、この“冷酷な時期”と重なりあつてゐるのである。『新領土』の編輯者たちは、春山のいうように“三十歳の半ばを超えた詩人”たち<sup>26</sup>であり、かれらが期待を賭けるのは、まさしく“事變後”に自我を確立することになつた世代であつた。

のちの鮎川信夫によれば、戦前のモダニズム運動は、『詩と詩論』にはじまり『新領土』に終わるが、“この詩派を代表する詩人村野四郎”<sup>27</sup>は、6月、第2号の「後記」に、このようにも書いた。

力に充ちた創造的な壯年期に踏み入るためには、もう私たちは鶯のやう

に氣儘に歌つてゐることは出来ない。所謂エスプリ・ヌボアの觀念の上にも重量のある惨酷な再検討が與へな(マ)られるべき時期に達してゐる<sup>28</sup>。

『新領土』は、『詩法』と『20世紀』を継承して、“國際的に文學、文化の基準、動向を知る”ための、具体的には、ヨーロッパのモダニズム運動への窓口としての機能を果たそうとしたが、1941年5月、終刊<sup>29</sup>となる。大岡信によれば、“この雑誌は、当時の欧米の文學思潮を鋭敏に反映していたほとんど唯一の雑誌のように見えるし、事實、現在考えてみるとまったく異常に思われるくらい執拗に、欧米のジャーナリズムの動きを追って”いた<sup>30</sup>。

『新領土』が詩の領土を守備範囲とする一方、最新の國際情勢については、綜合雑誌『セルパン』があり、若い世代にも多くの読者をもっていた。春山がその編集を担当するのは1935年1月から1940年9月のあいだであるが、とくに1937年以降、あたかも『新領土』と呼応し補うかのように、海外の論壇に鋭敏に反応し状況を刻々と伝えていた<sup>31</sup>。1937年に限定すれば、この1月、『文學界』は前年11月に發表されたばかりの話題の書き物、アンドレ・ジイドの『ソヴェト旅行記』を小松清の部分訳で掲載したが、『セルパン』は、それを追って、2月から4月にわたってヨーロッパの知識人による、この書の批評を掲載していた。

さらに、『新領土』創刊と同じ5月、『セルパン』は、前年度からつづく一連のスペインをめぐる多数の評論のなかに、上田訳でエリオットの「スペイン革命と政治思想の頽廢」を掲載した。前年7月、すでに、スペインでは内乱がはじまっていたのである。

鏡は、『20世紀』時代につづく連作「青年の計畫」を創刊号に發表した。その後半部である。

フアシストの直觀力は墮落したね  
 議會擁護の輕氣球が山脈の下で輝いてゐるね  
 小麥色の娘たちはソプラノで農場を占領した  
 太陽は青年たちの近くで輝いてゐるね  
 大陸派は一人もゐないね

貝殻の光はシヤンパンの如く輝いた  
 農夫たちは花粉の中で蜂蜜と共に歌ひ  
 やがて海岸から新しい政治家たちが上陸する<sup>32</sup>

ヨーロッパでは、“新しい政治家”たる若い世代の国際義勇軍は、“議會擁護”のスペイン人民戦線を支援すべくかの地へ向かっていた。ただし、饒は、オーデンの新しい詩、「スペイン」をまだ知らない。この小冊子が出版されるのは、まさに『新領土』が創刊された、1937年5月のことだったのである。

『新領土』創刊のころ、青年論に包囲される世代の鮎川信夫は、大学の予科に進んだばかりであった。鮎川は、創刊の翌年、1938年2月、18歳で同人となる。忘れてならぬことは、かれが『新領土』の寄稿者であり、かつ、読者であったということだ。大岡はこの詩誌のモダニズムの不毛を指摘するが、そのなかで育っていったのが鮎川であった。かれは、『新領土』に実現されるはずの“轉換期”の詩、あるいは『詩と詩論』の“エスプリ・ヌボーの觀念”に“重量のある惨酷な再検討が與へられるべき”詩、それにもまして、その詩人たちのシンセリティの、目撃者となるのだ。

三木清の二つの“青年論”を収めた『現代學生論』<sup>33</sup>は、『新領土』創刊の年、1937年の9月に出版される。ここには瀧川幸辰も「大學と教授と學生」を寄せ、事件の当事者としての立場を語っていた。ただしその間、7月に日支事変<sup>34</sup>が勃発したのである。創刊から2か月のちのことである。“日支事変後の學生”とも呼ぶべき世代を新たにうみだす時代が到来する。

饒の「青年の計畫」は、のち、『新領土』終刊に先だつ1941年4月、『新領土詩集』に収録される。ただし、上の引用の最初の二行は削除された。わが国の“新しい政治家たち”のまえに、“議會擁護の輕氣球”が呼びかける行動の余地は、このとき、なくなっていたのである。

## 2. 創刊号　　オーデン、スペンダー、デイ・ルイス、そして飛行機

『新領土』創刊号は、上田保の「後記」によれば、“抒情詩及び抒情詩人に對する歴史的批判”をおこなう春山行夫の「抒情詩の本質」を巻頭に置き、



つづいて、“詩の新しい轉換に對するたくましい示唆”<sup>35</sup>を与える、近藤東の「詩への希望」を配した。

近藤は、「もはや國民を他人としてその運命を傍觀したり、敘述したりすることは決して現代の詩人の任務ではない」という村野四郎のこぼれを引きながら、“知識人によくない時代が、詩人のみに順なる時代である筈はない”<sup>36</sup>と書く。

春山は“少し飛行家に似た風貌”<sup>37</sup>の詩人に語らせる。“問題は、抒情詩が果して昔のままの uniformly lyrical textureであつていいかといふことにもあるし、詩の本質といふことは、詩を論じ、詩の手法を發展させ、詩を新しい領域と感覺によつて生かしてゆくといふことにも一層大きな重要性をもつてゐる”と。詩人は、いう。

環境が詩人に對して敵對的で邪惡であるやうに見える場合、詩人は狂氣になることも、教訓的な詩に向ふことも容易である。君は狂氣を撰んで後方へ退却し、環境のみでなく、同時代の動きのすべてに反對する術だけを固執してゐる。我々は主知の規律を選んで、環境の撰擇と適應とを發見しようとする。(付点引用者)

この“抒情詩及び抒情詩人に對する歴史的批判”は饒正太郎にも共通する。ただし、“同時代が必要だ”とし“環境を改造し、修正する”ことへ向かう饒たちと、“環境”に對して“主知の規律”で立ち向かおうとする春山たちとのあいだに、ここでもまた、微妙なずれ<sup>38</sup>をみることができのかもしれない。

創刊号は二つの特輯をおこなった。ひとつは、「アンドレ・ジイド『ソヴェト旅行記』の批判」である。これは明らかに『セルパン』における話題の書をめぐる論争紹介を継ぐもの<sup>39</sup>である。裏扉に、“全世界の知識階級を聳動させたジイドのソヴェト大旅行!! その赤裸々な報告書全文ここに待望の完譯成る”とする、第一書房の小松清訳アンドレ・ジイド『ソヴェト旅行記』の広告があるように、かれがソヴィエト支持から“轉向”をしたかどうかは、わが国の行動主義文学にとっては重大な関心<sup>40</sup>であつたのだ。この書の翻訳

はこの年3月下旬に出版されたが、すでにこのとき三刷になっていた。

そのまえに置かれたもうひとつの特輯が、「イギリスの新詩人」<sup>41</sup>である。ここに、“ニュー・カントリー派”すなわちオーデン・グループの詩と評論が紹介された。おなじく上田の「後記」によれば、“最近イギリス詩壇に華々しい活動を見せてゐる急進的詩人スペンダー、デイ・ルイスの新説な詩論、およびオーデンの詩篇”である。

オーデンの詩“ODE”<sup>42</sup>は、阿比留信訳である。紙幅の許すかぎり引用しよう。鮎川信夫はまだ同人ではないが、この作品のみならず、つづくスペンダーとデイ・ルイスの評論もまた、戦後になってかれが利用することになるからでもある。

その冒頭。

中庭を見渡す部屋から、  
 飛んでゐる三つの飛行機の姿の中に、私は見つめてみた、  
 その年が朽ち行き、  
 年月の根株は燻りて冬の灰となり、  
 最後の日が落ちて行くのを、

その夜の、悪夢の“情景”がつぎつぎに展開される。そのなかに、亡霊のように語りかける者もいる。

また、寒いヨオロッパの、秋の滅亡のさなかに、  
 クリスタファアが立つてみた、彼の顔には  
 無智に面と向つてたじろいだために皺が  
 増えてみた 《イギリス人にさう云へ》  
 打ち震へながら彼は云つた、  
 《人間は<sup>なましひ</sup>靈魂だ》と<sup>43</sup>。

そして、目が覚める。“新年の朝”である。

遙か下の中庭では  
 乞食が、東ヨオロッパの國の土に話しかけてゐる、  
 《もつと大きな聲で話してはくれまいか。  
 おまへはシリアの馬どもよりも疾い男の話を  
 聞いたことがあるか。  
 コリントの無頼漢ならずものを砂を敷きつめた演技場で  
 投げ飛ばしたのはその男なのか。  
 その男はもう地峽を渡つて行つてしまつたのか。その男の  
 捜し求めてゐるのは  
 立派なアセンズの市街まちとそして我々なのか》と。

“寓意”あるいは“譬話”による語り口に、オーデン・グループの特徴が抽出できよう。古い年月との訣別、すなわち、現状の打破。ためらいと悪夢。そして、新しい時代への期待である。

“乞食が、東ヨオロッパの國の土に話しかけてゐる”とは、いうまでもなく、コミュニズムへの期待、より具体的にいえば、ソヴィエトへの強い関心である。1932年のオーデンのメッセージ、あるいは、『新領土』創刊にあたってオーデンに託されたメッセージは、アンドレ・ジイド『ソヴェト旅行記』をめぐる論争と組みあわせることによって、より明確に浮かびあがるのである。

スペンダーの「詩論 Fragments」は北村常夫訳である。この詩論は標題のごとく、断片から構成されている。四つの断片をのぞいて、“彼 [エリオット] の作品の一般的弱點はその断片性である”<sup>44</sup>など、そのほとんどが、1935年3月に出版された *The Destructive Element: A Study of Modern Writers and Beliefs* の、エリオットに関する章から採られている。断片と断片とのあいだの理論の流れがときおり掴みにくいのは、配列がかならずしも原書どおりでないからである。

たとえば、つぎの断片は、もちろんエリオットについて語られた一部である。

創作中の詩人を支配する信念が、現代社会、並びに法律の基礎たる信念と無残にも分裂するならば、その詩人の詩は詩人の周囲の生活とは無縁のものに思はれる。詩人はこの場合、風變りな反抗的個人主義的態度をとるか、乃至は自己の觀念を作り上げて社会に關聯せしめねばならぬ。

原典によれば、スペンダーは、エリオットの社会との関わり方は、伝統の理念にもとづいた現代の功利主義への反発にすぎない、というのである。しかし、この切りとられた断片を単独に読めば、オーデン・グループのメッセージとしても読めるだろう。『新領土』になんらかの理念あるいは方向があったとすれば、社会に対して“風變りな反抗的個人主義的態度”はもちろん採るところではなく、詩人と社会との関係、そのシンセリテティであった。

最後の断片はこうである。

エリオットの「岩」の教義は、カトリックでもプロテスタントでもなく、宗教改革以後の英國の歴史に適合するものでもない。それは強烈な國家主義と神の選民であるといふ民族的自己満足に適合した舊約聖書の教義である。エリオットはフアシストではない。然し、彼の「異端の神々を求めて」の中の傳統論中には、ムソリニイやヒットラーやウェズリーが反對するやうな文句は一つもない。

最後に置かれたこの断片は、最後である故に、スペンダーとエリオットとの政治的立場のちがいを浮かびあがらせることになる。1930年代のエリオット評価の一つとしてすでに共有されていたから新しい視点ではないが、『新領土』の創刊号に北村の訳ではじめて登場するエリオットが政治的な視点からとらえられていることに注意しなければならない。

もう一点、デイ・ルイスの評論は、春山訳「詩に對する期待」の第一章<sup>45</sup>である。これはオーデン・グループの立場を代弁するものと考えていい。かれは、

戦後の詩は廢墟から生れた。その直系の祖先はホプキンズとオウエン

とエリオットである。

と宣言する。このとき、“祖先崇拜”ということばは、“我々の仲間の二三の者”には“唯一の可能な愛國主義”と“一つだけの過去との必要な連繫”そして、“傳統といふこと”を意味するのである。祖先との出会いの体験は、1932年5月に刊行されたオーデンの『雄辯家』のなかの「飛行士の日記」に、“譬話”としての確に描かれている、とかれはいう。

私が十六才の半ばを迎えるまでは、伯父は僕を彼の部屋に招かなかつた。我々は夕餐にシヤンパンを抜いた。僕は伯父の部屋から出た時、彼が誰れであり、またなにものであつたかを知つた。それは僕の眞實の祖先であつた。

若い飛行士の体験を、デイ・ルイスはこのように敷衍する。

我々の各自が過去となんらかの個人的な連繫を持つてゐるといふこと、なんらかの自然な、乃至は準超自然的な人物から我々が力と元氣とを引きだすといふこと、あるなにびとかとの血縁關係が突然に認められるやうになるといふこと、さういふ感情は我々にとつて最高の重要性を持つてゐる。

この“祖先崇拜”の具体例を、スペンダーの作品「僕は絶へず眞に偉大であつた人間を考へてゐる」に指摘して、かれは断言する。

大戦は我々の青春を根元から引き抜いてしまつた。私はスペンダーの詩が過去との照應を再建しようとする試みに、全快の小さな奇蹟に成功してゐるのを見る。そして、それが祖先崇拜の形態をとつてゐる。

春山の訳では原書に引用されたスペンダーの作品が省略されている。しかし、そのために、オーデン・グループの若々しさが強調されることになる。そし

て、デイ・ルイスが主張するイギリスの戦後の新詩人たちの“全快の小さな奇蹟”がほんとうだとすれば、『新領土』の同人がいう“知識人によくない時代”にありながら“國民を他人としてその運命を傍觀”せず、“詩を新しい領域と感覺によつて生かしてゆく”ことは可能であろう。“新しい領土”は拓かれるかに見えるのだ。

1932年に出版されたオーデンの飛行士は、某年某月28日朝3時40分の飛行日誌を最後に、飛び立って行く<sup>46</sup>。オーデンたちの心象を思いつくままにあげれば、国境、山嶺、地図、<sup>コンパス</sup> 磁石、<sup>スパイ</sup> 密偵であり、そして、かれらの「<sup>トポグラフィ</sup>地 理」<sup>トポグラフィ</sup> 欠かせないのが、飛行機である。たとえば、次号6月には上田保訳でスペンダーの「飛行場付近の風景」がある。『新領土』の時代背景に飛行機があったことを忘れてはならない。

飛行機の航続性能と信頼性は欧州大戦中に飛躍的に向上し、戦後の飛行機時代を迎えた。旅客機と戦闘機は人々を魅了してすでに久しい。関東大震災の直後、通信の途絶えた東京・関西間を陸海民間の多数の飛行機が連絡に活躍した。1927年のリンドバーグ単独大西洋飛行、1929年4月のツェッペリン号の来日、その8月のリンドバーグ夫妻の来日、そして1932年3月の子息誘拐事件と話題はつきない。満州事变後、苦闘中の軍に拠金によって飛行機を献納する運動が起こり、1932年1月、陸軍への「愛国号」二機の式典に大群衆が代々木練兵場へと集まったという。1934年、ダグラスDC2が羽田飛行場の600メートルの滑走路に登場する<sup>47</sup>。そして、朝日新聞社はジョージ六世の戴冠式を機会に訪欧飛行を企画した。1937年4月6日に立川飛行場を離陸した陸軍機「神風号」は、10日、ロンドンのクロイドン飛行場に到着した。その飛行時間は都市間連絡飛行の国際新記録であった。帰国した二人の飛行士は、各地の歓迎祝賀会に迎えられた。また、加藤建夫が指揮する、のちにいう、「隼戦闘隊」が活動をはじめたのが、『新領土』創刊の年、日支事变からであった<sup>48</sup>。

飛行あるいは飛翔の心象は、オーデンに見たように、もちろん、詩人たちを魅了した。オーデンの飛行士は、“警話”でいえば、地峡を渡つて”おそらく新しい領土たる“東ヨオロッパの國”へ向かおうとしていた。そして、飛行機が、超現実主義とほぼ同時にドイツからわが国にもたらされ、新即物

主義にとって、重要な役割を果たした<sup>49</sup>ことは記憶されていい。その機能性を追求するところから生まれた形態は、まさに恰好の例であったのだ。形態あるいは造型は、抒情詩を超えようとするモダニストたちに訴えるところが大きかったのである。たとえば、身体を形態として見る村野の眼は、『詩法』時代の作品となり、のちに、1939年12月の『體操詩集』として結実する。

さらに、忘れてならぬことは、1934年7月に刊行された話題の書、堀口大學訳サン=テクジュベリ『夜間飛行』の存在である。堀口は多くの翻訳を手がけてきたが、これは“ 翻譯の仕事に、新しい機能を明白に意識してかかった最初の仕事 ” であった。“ 夜と暴風雨のうちに進路を失つた一臺の飛行機 ” の周囲に“ 自由の問題、行動の問題、個人の幸福の問題、生命の價值等を ” 織りこんだこの作品は、“ 行き詰まつた我國近時の文壇の行手を示す照明弾として絶好 ”<sup>50</sup>なものとして選ばれたのである。さらに、翌年5月、『南方飛行便』が登場する。その、1935年2月づけの「譯者の言葉」。

小説らしい小説がしきりに要望され、行動主義の文學的實踐方法がしきりに論議され、能動精神の範疇がしきりに究討される一方、新しい意味のロマンチズムが擡頭しつつある今日の我國の文壇に、それらの問題、それらの要望のそれぞれに對する「一つの」解答を、「一つの」實行を提示するこの小説の意義ある役割を信じて、私はこの譯を世に贈る<sup>51</sup>。

飛行機をめぐる人々は、与えられた“ 環境 ” のなかで行動する人間であり、人間としての条件、あるいは実存の人間觀を具現していたのである。

ただし、機体にその所属する国が描かれたとき、飛行機は別の機能を与えられるであろう。ヨーロッパでも、戦場は、1930年代の若い詩人が夢見たような“ 譬話 ” に終わらなかつたのである。春山の“ 少し飛行家に似た風貌 ” の詩人は、主知と感覚との均衡によって詩の“ 新しい領域 ” を拓く決意を語るが、この詩人もまた、現実の飛行士と折りあいをつけることを求められるのだ。

### 3. 1937年の『新領土』

C・デイ・ルイスの『詩に對する期待』が出版されたのは1934年9月だが、『詩法』や『20世紀』は時を移さずこれを翻訳し紹介<sup>52</sup>していた。1937年5月の『新領土』創刊号はその第一章を掲載することによって、これをニュー・カントリー派あるいはオーデン・グループの宣言として位置づけ、かつ、“新しい出発”の指針としようとした。ただし、その3年半近くのあいだに、状況は急変していた。

前年、1936年3月、再軍備したドイツはラインラントに進駐。5月、イタリアはアビシニアを併合した。7月には、スペインで内乱が始まった。ヨーロッパでは、ファシズム陣営対デモクラシー陣営の対決、来るべき戦争の構図がすでに話題となっていたのだ。

『新領土』創刊号が「アンドレ・ジイド『ソヴェト旅行記』の批判」を特輯した同じ月、1937年5月、『セルパン』は、前年末に引きつづき、スペインを特輯し、上田保がT・S・エリオットの文章を「スペイン革命と政治思想の頽廢」と題して訳出した。末尾に記されたように『クライテリオン』1937年1月の「寸評」が出典<sup>53</sup>だが、原典には1936年11月18日の日付がつけられていた。切迫した状況でのエリオットの発言<sup>54</sup>であった。

エリオットによれば、現段階すなわち、1936年11月現在、スペインの内乱をめぐってヨーロッパ諸国が熱にかられて二つの陣営が対決するところには至っていない。

我々の見地からすれば、現在のところ、それはむしろ敵對する觀念の國際的な内亂である。この國に於ける各個人として、我々が現在逢着してゐる危険は、我々の頭腦内に於ける觀念の不安定な平衡が、我々各個人の環境や氣質に應じ、この一方かもしくは他方の矯激な見地によつて顛覆させられはしないかといふ事である。

しかし、問題は、新聞紙の大部分がこの腐敗を抑制するために何事かをなすどころか、かえって積極的にそれを促進していることである。事情もわから



ぬ外国の問題を単純化して読者を惹きつけようとしている。“その結果精神的弛緩を誘発し、もつて読者の精神内に於ける心的緊張を分解してゐる”のである。

スペイン政府を支持するものもあればフランコを支持するものもある。しかし、

人人は、實際問題として、二つの観念の間の、即ちベルリンのそれと、モスクウのそれとの間の相剋に於いてその一方の側に組みせようと我々に要求するものに外ならぬ。そして、そのいづれも「デモクラシイ」とは極めて無縁の存在なのである。

事態はエリオットが怖れていたように、二つの観念をめぐって二つの陣営に分裂し対決するにいたる。 Kommunismusかファシズムか。この対決の構図はイギリスの若い知識人にとっては二者択一を意味していた。わが国にあっては、日支事変以降の時局の深刻化するなかにあつて、“精神的弛緩”に陥らぬ精神の強靱さによって立ちつづけることが求められるであろう。鮎川がこれを読んだかどうか確かめることはできない。ただし、確実な証拠をもっていえることは、『セルパン』の「スペイン革命と政治思想の頽廢」と対をなす、のちの『新領土』の「政治と知識階級」の一節は、戦後の鮎川の立場を確かめるために使われることになるのだ。

1936年のわが国は2・26事件の年であつた。東京市の戒厳令が解かれたのが7月。その31日に国際オリンピック委員会が1940年の東京大会を決定したことも手伝つて、8月のベルリン・オリンピックのラジオ中継に国内は熱狂した<sup>55</sup>。そして、日独防共協定にイタリアが加わるのが、この11月である。

年があらたまり、『新領土』が刊行された翌々月、1937年7月、廬溝橋の事件を発端に、新たな領土をめぐつて、日支事変が勃発した。福島鏗郎によれば、“時局”ということばは、出版物に関しては、これを境にして多く使われるようになる<sup>56</sup>。この月の特輯「現代詩の諸問題」のひとつに、『詩に對する期待』の第6章が安藤一郎訳で「現代詩人の出發點」と題されて、収録された。ここには詩人の感性の出發點が Kommunismusにあることが明確に示

されていた。しかし、日本の中国侵略をめぐって、レフト・ブック・クラブを主宰し左翼的な書き物を出版していた、ゴランツ社が自社の刊行物を日本に送らぬことにしたのは、その9月のことであった<sup>57</sup>。

創刊号に「イギリスの新詩人」を掲載した『新領土』は、翌6月、第2号に、「政治と文學」を特輯した。スペインの内乱を“戦争”としてとらえたヨーロッパの論壇に、敏感に反応していたのだ。そのひとつが、デイ・ルイスの「ハックスレイ氏への公開状」である。これは、前年1936年11月にレフト・ブック・クラブから刊行されたパンフレットに基づいたもの<sup>58</sup>であり、刊行からわずか半年の時間差である。

デイ・ルイスは、“一般の英國人が確實なガスマスクのためには生得権も賣り拂はうと考へたり、又英國知識階級が彼等の鼻の下で銃劔を振り廻されることに最早無關心であられなくなつた”状況にあると見る。この状況にあつては、ハクスレイの平和主義は“絶望的な無爲の政策についての尤もらしい辯解を述べたものであるとしか考へられない”のである。かれは、人民戦線の構築を提言する。記者は堺謙三。

我々は最近フランスに成立したのと同一直線上に一刻も早く 戦線を結成しなくてはならない。 戦線の支柱は労働運動であらう。従つてその運動に統一を與へることが急務である。我々の平和政策の中心は、集團保障と條約の神聖及び軍備縮少を實現すべく武器の個人的製造を廢止することである。このことゝデモクラシイを守る爲に必要上權力を行使することゝは矛盾するものではない。ファシストの侵略を防ぐ爲に集團保障は必要であり、又デモクラシイは現在武装することが必要であるが、併しその結果帝國主義者の無暴な手に武器を與へるのは望ましくないことである。(原文のまま)

期待されるのは、大衆あるいは人民である。その“與論は尚無限の可能性を持つ力である。我々の仕事はそれを組織し、行動に導くことである。我々は自分の魂よりも、救ふべき一層重要なものが他にあることを記憶すべきである”とし、“若しそれを救はんとするなら我々は直ちに行動に移らなくては

ならない”と、デイ・ルイスは結ぶ。

ただし、創刊早々から文脈によっては“人民戦線”ということばを配慮せねばならなかった時代が『新領土』の背景にある。 Kommunismusはもちろん、そもそもデモクラシすら危険なことばであった。このような状況でつくりだされたことばが、“行動主義”である。しかしながら、イギリスの行動主義文学の動向を紹介するにあたって、編集方針について弁解が必要な状況があった。“日中戦争が始まる頃には、[毎月公表されていた発禁件数は]発表されなくなり、しかも検閲による発禁・削除処分は増加の一途をたどっていた”<sup>59</sup>のである。たとえば、第一書房から3月に完訳出版された小松清訳『ソヴェト旅行記』は発行部数をすべて売り尽くし絶版となり、新たに「ウージェヌ・ダビを想ふ」を付けて9月1日に岩波文庫として出版されたが、ただちに発禁となり、同月6日、改訂版<sup>60</sup>とされた。

削除されたのは、つぎのようにはじまる欧州大戦の体験を歌ったダビの詩であった。

はたち  
廿歳のとき俺は兵卒だつた  
まだほんの子供なのに  
戦争をするなんて  
なんと惨めなことだらう

特輯「イギリスの新詩人」「政治と文學」そしてスペンダーの「現代詩人の出発点」について、『新領土』は8月に、「政治と知識階級」<sup>61</sup>と題して、上田訳でエリオットの発言を紹介した。出典はこの年、『クライテリオン』の1937年4月の「寸評」であり、上のデイ・ルイスのハクスレイ批判に触れたものである。翻訳掲載にいたる時間差はさらにちぎまっている。

デイ・ルイスは“我々は現在デモクラシが武装すべきだと考へてゐるが、  
的政府の無責任な手に龐大な軍備をゆだねようとは思はない”  
(原文のまま)という。しかし、“結局、ロシアの普遍的帝國主義は從來達成されたいかなる帝國主義よりも一層龐大な帝國主義にすぎないものではないか”とエリオットは一蹴する。

現下の最大の危険は、各國のインテリゲンチアにとつて極めて誘惑的な「人民戦線」の妄想であるのやうに思はれる。我が國の自由主義者たちは、ファシズムの妖怪に幻惑され、自ら手を下してその活動を助長してゐるやうに見える。主義を屈して、極端な左翼戦線でなくては無意味なやうな人民戦線に参加する自稱リアリスト達は、もとの壺に帰らうとしないと同時に、できあがつてみれば極めて非人民戦線的な妖精を苦心して創り出してゐるやうなものである。

デイ・ルイスたちの“行動主義”にこの発言が歯止めとなりえたかは疑わしい。しかし、わが國の状況に照らしてみれば、エリオットは危険な文学者ではなかつたのである。

重要なことがある。『新領土』におけるエリオットの登場過程では、ここでもまた、ニュー・カンントリー派との関連で、「政治と知識階級」として、状況を語るエリオットが、まず先だつて紹介されたことである。“戦後の詩は廢墟から生まれた。その直系の祖先はホブキンズとオウエンとエリオットである”とデイ・ルイスは「詩に對する期待」に記した。若い読者が『新領土』を窓としてイギリス現代詩に導かれるとすれば、そのエリオットの理解は、教室での通時的・文学史的な接近ではなく、ニュー・カンントリー派あるは少なくともオーデン・グループとの対立を経由しておこなわれるであろう。エリオットの登場は「文学と政治」という極めて切実な状況を背景としていたのである。

ただし、当時、イギリスの若い詩人たちを巻き込んだ「政治と文學」の問題はわが國にあっては極めて危険なテーマであつた。語りうる基盤として、たとえば、ヨーロッパの詩人たちが守ろうとしていたデモクラシーはすでに消滅していた。そして、思い起こすべきは、イギリスの“政治と文學”のテーマはヨーロッパにおける来るべき大戦争の予感と表裏一体であつた<sup>62</sup>ということだ。そして、わが國にあっては、満州事変以降、政局の不安定をへて日支事変の勃発にいたり、その予感は、抜きさしならぬ現実となりつつあつた。

1937年11月、創刊号に「詩への希望」を書いた半年後、近藤東は「後記」に記す。

現実の強烈さに抵抗する姿勢は諷刺的方法にあるが、それも不安定な状態に到つたならば、作者の意見は、意見として作品の中から姿を消す必要があらう。このこと自身は現實に対する作者の敗北ではない。新しい戦術であり、新しい文學方法である<sup>63</sup>。

おなじ「後記」に、村野四郎は記す。

『新領土』が毎月多くの海外文學のエッセイと作品を掲載するのは、たとへ、これに依つて文學に関する國際的な文化的仕事を遂行する爲であつて、たとへニュー・カンントリー派の作品、エッセイを紹介したところで、我々は決してニュー・カンントリー派の運動に自身投入するのでも何でもない<sup>64</sup>。

行動主義文學は明確に否定される。とすれば、残るのは、“青年への希望”である。

村野が同号に寄せた詩は「近代修身」であつた。5行を省略する。

君らは手で歩くべきだ  
 青空を蹴り  
 つねに墜落のポーズを作り  
 雲雀を臀部の上方で歌はせよ

……

ときには磨かれた舗道に  
 君らの苦惱をうつし  
 婦人らの裾の下から  
 エロチック  
 肉慾的な行進歌をうたへ  
 また遠く江灣をのぞみ

水にうつる病院船を  
 従軍看護婦の無機物のごとき肉體をながめ  
 はためく我等のものに敬禮せよ  
 カづよい足音から遠のき  
 青空を忘れて了へ  
 かくして清きものを感覺の中に追ひ  
 鼻と口から惡徳の汁を流してゆけ  
 とにかく とにかく  
 君らの手で地球を支へよ<sup>65</sup>

近代の比喩としての“墜落”を倒立歩行の姿勢に重ねあわせてみても、その身の修めかたは、あくまでも形態としてのポーズを越えることはないのだ。ただし、饒正太郎の「青年の計畫」と比べてみれば、両者の詩人としての力量は並ぶべくもない。

1937年11月の「後記」に焦点をあてるのは他でもない。この月、中井正一ら同人が治安維持法違反によって検挙され、『世界文化』は終刊を余儀なくされるからである。翌月15日には労農派の学者グループとともに反ファシズム勢力として人民戦線方式を提唱する日本無産党と日本労働組合全国評議会の幹部が検挙されることになる。いわゆる第一次人民戦線事件である。翌1938年2月、第二次人民戦線事件。司法省は、“いまや民主主義・自由主義の思想は共産主義発生の温床”<sup>66</sup>であるとした。河合栄治郎の書物が発禁となるのはその10月。いわゆる河合事件の発端である。

創刊号に「詩に對する期待」第一章を訳出した春山行夫は、おなじ1937年11月の「後記」にこう記した。

今朝は四時半に起きて『新領土』の原稿を書く。遠くで樂隊と軍歌がきこえる。

僕の家からナナメの裏に當るところに神學校の寄宿舎ができて、六時頃になると讚美歌の合唱があり、朝の説教がある。

それからしばらくすると、朝のラヂヲ體操の歌である。

朝だけでもこれだけ詩の領域が拡大されてゐる。

春山はつづいて“今月はつひに詩が書けない”と記す。なぜ詩が書けなかったのか、わたしたちの詮索は阻まれている。しかしながら、“詩の領域が拡大”されることは詩における“新領土”の拡大であり、むしろ、歓迎されるべきことであつたはずではないか。

日常の領土はどうか。春山のいう“ラヂヲ體操”、正式名称「國民保健體操」すなわち「ラヂオ體操」を例にとろう。これは逓信省簡易保険局の企画を日本放送協会が受け、紀元節を期して1928年2月11日、JOAKではじまった。翌年、全国放送となる。1931年、応募歌詞に堀内敬三の曲になる「ラヂオ體操の歌」が加わる<sup>67</sup>。満州事變の年である。第二體操が加わつたのが1932年。夏休みの早起き会、「ラヂオ體操の會」が東京ではじまつたのは1930年だが、翌年には大規模な主催団体が構成され、1932年には、警視庁が主催に加わり、後援団体に内務省、文部省、帝国在郷軍人会本部などが名をつらね、以降、夏毎に参加人が増えていった。『新領土』創刊の年、日支事變後の1937年8月、文部省は「國民心身鍛練運動週間」を設定してその一層の普及奨励に努める。この夏、「ラヂオ體操の會」の延べ参加者数は、前年の九千万から一挙に一億二千万人に達した<sup>68</sup>。すでに1935年から、東京のいくつかの地区では夏休みにかぎらず年中無休で「ラヂオ體操の會」が開催<sup>69</sup>されていたから、春山の耳にとどいたのはその歌であつたろう。1937年9月、近衛内閣から「國民精神總動員実施要綱」が発表される。それは、彼方の人民戦線とは似て非なるものであつた。

年が明けて、1938年1月、寄稿者による「現代に於ける詩の意義」に村野は記す。

新時代の詩人達が現代の混沌に對して持つこの種の知性の抗争は一つの宿命ではあるが、詩に一つの價値をプラスするものだと思ふ。(略)何故なら純粹に詩であることは決して没時代的な忘我状態からのみえられるものではなくて、一つの新しい即時代的な事物性からも獲得し得られる筈だからである<sup>70</sup>。

抒情詩でなく“新しい即時的な事物性”を目指す村野の方法は、連作「近代修身」に反映されることになる。同月号の「近代修身 廣場に於いて」である。

一個の渾沌は  
 美しく刈り込まれたバラの<sup>かきね</sup> 牆にかこまれ  
 雄鶏のやうに長い蹠爪を引きづつてゐる  
 熱帯産龍舌蘭と寒帯産針葉樹がたちならぶ  
 こゝの廣場をおそるるなかれ  
 寧ろ純粹の影が墜ちてくる君らの上空をながめよ  
 われらの報國女學生號  
 われらのあなたが一つの感情の境界を超え  
 かの汎神論的な空の中に失はれるときこそ  
 われわれの悲劇はあらゆるものをこえるだらう  
 君らは肉體で出来てゐる  
 しかも君らは責任の眞實を持つてゐる  
 君らは乾いたペンを擱け  
 そして彼女の行方をみとゞけよ  
 彼女の行方をみとどくべきだ<sup>71</sup>

青年がたたずむ広場は“現代の混沌”のなかでかろうじて確保された領土である。ただし、“肉體で出来てゐる”その“君ら”の上空に、詩人は飛行機を配するのだ。飛行機は、機能性による無機質の美しい形態、すなわち“純粹の影”をおとす。だが、それを“報國女學生號”と名付けることによって、無機質のものが持つ形態美に“国民精神總動員”のイデオロギー性が与えられるのだ。この作品は、そのまま、1941年4月の『新領土詩集』に収録<sup>72</sup>された。

この1938年1月23日、御前會議は「支那事变處理根本方針」を決定する。3月、國家總動員法が議會を通過する。「ラヂオ體操」はこのころから、朝の



二回に加えて、午後2時30分からも放送<sup>73</sup>されるようになる。

村野はけっして“没時代的な忘我状態”に陥ることはない。春山は“朝のラヂヲ體操の歌”を聞くが、かれはそれを「近代修身」に歌いこむことのできる力量を備えていた。

1938年5月の「近代修身」の、前半部である。

諸君よ  
 諸君が偉大な詩人であるなら  
 仕様のない  
 朝焼のために歌ひ  
 しなびたレモンの傍で  
 永遠を考へたまへ  
 諸君よ  
 諸君が詩人であるなら  
 祈のない音樂に追はれて  
 ラヂヲ體操をする少年たちの  
 白い<sup>あばら</sup>肋のために嘆き  
 鎖を跨いて(マ)ゆき  
 空に雲の悶えるのを知りなさい<sup>74</sup>

いささかの隙もない出来映えである。これが“詩の領域が擴大”された状況での“新しい戦術”であったかどうかは問わない。明らかなことは、“近代修身”の“新しい即時代的な事物性”の持つ健全さは、ラヂオ體操の背後にある“国民精神總動員”の状況を“没時代的”に排除することによって政治的であることだ。すでに、この3月、「國家總動員法案」は議決されていたのである。

鮎川が加盟する年、新しい年にふさわしく、1938年1月の『新領土』は特輯に「海外現代詩人論」を組んだ。その冒頭に置かれた岡橋祐の「ティ・エス・エリオット」は、短いものながら、この時代のわが国のエリオット体験を語って貴重である。

ティ・エス・エリオットを僕は對立意識のポエジイと名付けてゐる。この對立意識とは階級的對立とか社會的對立とかを意味せず、心理的なそれを意味してゐる。具體的に云へば、詩形、イマジユ、シチュアシオン、觀念などの持つ體位法的なりズムがそれだ。彼の作品にあつては情緒の進行は鋭角的なヂグザグ形を描く。さういふヂグザグ形が僕達の意識に刻み付ける軌跡は行き詰まつてどうにもならない現代の僕達の心理の或る部分を鮮やかに捉へてゐる。従つて彼の作品は陶醉を與へない、ばかりではない。僕にとつては時には生理的に苦痛でさへある。それにもかかはらず、彼は僕に詩的興奮を喚起する殆んど唯一の現代英詩人だ。詩を讀んで陶醉を感じるといふことと詩的興奮を感じるといふことは別の問題だからだ。前者は個人的な心理内の一事件にすぎないが、後者は美的感情であり美的感情は眞の意味のテクニツクを離れては存在しないからだ<sup>75</sup>。

オーデンたちの“直系の祖先”エリオットの、『荒地』の第一部が登場するのは、この年の8月である。

#### 注

1 『新領土』のテキストはアオイ書房版の復刻版（教育企画出版、1990年）とし、他に、関連する詩誌については、現代詩誌総覧編集委員会編『現代詩誌総覧』全6巻（日外アソシエーツ、1996年-1998年）の「解題」および「目次」を参照。

なお、紙幅の都合により本稿（その1）では第3章まで掲載されるが、以降に予定される章はつぎのとおり。

4 「1938年の鮎川信夫 『死者の埋葬』との出会い」、5 「1939年の『スペイン』」、6 「1940年1月の『一九三九年・九月』」、7 「エリオットとの出会い」、8 「伝統」、9 「1941年『新領土』終刊 抒情飛行へ」、10 「抒情飛行」、11 「世代」、12 「モダニズムの遺産」、13 「『アメリカ』 断片の死臭」

2 「宣言」『20世紀』創刊号（1934年12月）4-5。引用は中野嘉一『前衛詩運動史の研究 モダニズム詩の系譜』（東京：大原新生社、1975年）242頁による。

編集発行者は創刊号から饒正太郎であったが、第5号(1935年10月)から桑原圭介となる。

- 3 酒井正平「西崎晋逝去のこと」『新領土』第2巻第10号(1938年2月) 293-295。これは末尾に“1937. 11. 21”とされている。この日付からも、『新領土』創刊のころ、西崎晋・饒正太郎・上田修・酒井正平たちを核とする『20世紀』の“グルーブ”意識が強く残っていたことを推測させる。

また、従前に重ねて、同号の囲み広告にも『20世紀』のバックナンバーの紹介がある。第7号および第8号は「詩と社會性特輯」、第9(終刊)号(1936年12月)は「ヒューマニズム特輯」。申込先は菊池常二である。菊池も『新領土』の同人であり、のちに、鮎川信夫は、菊池から西崎の詩集とともに『20世紀』を受け取り、“質量ともに詩誌として非常に秀れた内容を持ってゐる”と1938年11月の日記に記す。のちに『荒地』となる雑誌の計画が持ちあがっていたところである。

- 4 饒正太郎「後記」『新領土』第1巻第1号(1937年5月) 77。さらに、饒は翌月号「後記」『新領土』第1巻第2号(1937年6月) 133に、こう記している。

天才には時代性がなく、歴史的発展性がない。例へば萩原朔太郎の韻律的天才詩人がそれである。或ひは文學界に於ける林房雄の多舌小心症のフアショ・リベラリストなども同じことである。虚偽と矛盾で渦巻いてゐる現實に直面してゐるわれわれは、文化人として常に政治を放棄してはならない。

- 5 『日本浪漫派』を代表する保田與重郎は、“描くではなく歌ふ。内容は物事ではなく、魂と心情の抒情を要求する”と書いた。これに対して饒正太郎は、“心情の抒情を求める詩人や魂で詩を書く詩人たちは完全にアマチュアの詩人たちであり、ディレッタンティズムと四つにとりくむ感傷的人物である。感傷的人物は不完全なる芸術家であるとエリオットは言ふ”と、「日本浪漫派の詩人たちへ」『20世紀』第4号(1935年7月)で批判した。参照、中野嘉一『前衛詩運動史の研究』、250-253頁。

- 6 『世界文化』は創刊に際し、“所謂『非常時』 危機”にあたって“學問文化への不信頼と絶望”に陥ることを戒めた。参照、『巻頭言』『世界文化』創刊号(1935年2月)扉。

- 7 *New Country: Prose and Poetry by the Authors of New Signatures*, ed. Michael Roberts (London: Hogarth Press, March, 1933). ここには詩論として、C. Day Lewis, “Letter to a Young Revolutionary”とStephen Spender, “Poetry and Revolution”、そして詩には、W. H. Auden の“Communist to Others”を含む4点、Day Lewis の1点、Spender の4点が収録された。

この出版が3月であることは、Samuel Hynes, *The Auden Generation: Literature and Politics in England in the 1930s* (Faber, 1976), p. 102による。発行月については、本稿では多くはこの書により、ほかに、B. C. Bloomfield, *W. H. Auden: A*

*Bibliography: The Early Years through 1955* (The University Press of Virginia, 1964) など  
を適宜参照している。なお、*New Signatures: Poems by Several Hands*, collected by  
Michael Roberts (London: Hogarth Press, 1932)の出版は2月。

- 8 新庄嘉章「ラモン・フェルナンデス」松吉江喬編『世界文藝大辭典』全7冊（中  
央公論社、1935年10月-1937年11月）。
- 9 すでに小松清には、『行動主義文學論』（紀伊国屋書店、1935年6月）がある。鮎  
川は1938年10月、この書を読む。

また、中野嘉一によれば、ジッド、マルロオ、フェルナンデスなどのフランス  
文学の新しい動向の紹介、そして、『夜間飛行』（1934年7月）や小松清訳マルロ  
オ『征服者』（改造社、1934年11月）などの翻訳の登場、さらには、“ジッドのい  
わゆるコミュニズムへの「転向」に対する関心などが、プロレタリア文学の敗退  
と重なりあって、わが文壇一部の注目をひきつけつつあった”ころ、1934年9月、  
『新潮』の文芸時評で舟橋聖一が“作家の積極的な活動を主張したとき、インテ  
リゲンツィアの能動性という声が文壇内部のものとして明瞭になった”（240頁）  
のである。

なお、小松清「ジード」『世界文藝大辭典』によれば、“各人は最も個性的で  
あつてこそ最もよく共同體に仕へ得る」と言つて、彼[ジード]は一九三一年以來、  
コミュニズムに轉向した。この間の彼の思考の發展は『日記抄』‘Pages de  
journa’（1934）に述べられてゐる”と。1936年11月の『ソヴェト旅行記』がわが国  
に与えた衝撃を推測することができよう。

- 10 『行動』の中心の人物は舟橋聖一・阿部知二・中村健蔵らであった。これは、  
1935年3月、「能動精神座談會」を特輯した。出席者は、武田麟太郎、戸坂潤、木  
下半治、窪川鶴次郎、阿部知二、森山啓、舟橋聖一、蠟山芳郎、三木清、田邊茂  
一。同年6月に、永田逸郎訳ラモン・フェルナンデス「文學と政治」[行動主義特  
輯]『行動』（1935年6月）、198-205がある。資料として、小田切進編明治文献資料  
刊行会『現代日本文芸総覧：文学・芸術・思想関係雑誌細目及び解題』全4冊  
（明治文献：[増補改訂版]大空社、1992年）を参照。

なお、三木清は1935年3月の『改造』に記す。“この二三ヶ月以來、いはゆる能  
動的精神の宣伝が行はれ、行動主義が提唱され、そして知識階級の問題が新たに  
討論された”と。三木によれば、その実体はむしろ“知識階級の困惑を表現”  
（傍点原文のまま）するものであった。参照、三木清「行動の人間について」『三  
木清全集』（岩波書店、1966-1988年）第11巻、412頁。なお、1935年春の石田憲  
次「英文学と日本精神」も、英文学における行動主義のひとつの現象と見ること  
もできよう。詳細は、拙稿「西田幾多郎『伝統主義に就て』を読む 同時代の  
T・S・エリオット理解に関連して」『同志社大学英語英文学研究』第70号  
（1998年3月）、59を参照されたい。

- 11 『行動文學』の中心となつたのは、舟橋聖一・田邊茂一・豊田三郎らであり、

1936年6月、創刊号の特輯を「行動主義文學再出發に寄せて」とした。ここには、春山行夫「行動主義と文學」が含まれる。また、新庄嘉章訳アンドレ・マルロオ「人間の條件」の連載が試みられたのも同誌である。また、このころ、スペンダーの詩の翻訳も安藤一郎訳で掲載された。

- 12 W. H. Auden, "Paid on Both Sides: A Charade," *The Criterion*, IX, No. 35 (Jan., 1930), 268-290. また、W. H. Auden, *Poems* (Faber and Faber, 1930)の出版は、その9月。なお、1930年代のエリオットについては、拙稿「T・S・エリオットと1930年代ミュンヘン協定まで」『同志社大学英語英文学研究』第26号(1981年2月)、23-69を参照されたい。

- 13 1936年、John Lehmannはつぎのように、オーデンをニュー・カンントリー派に位置づける。

W. H. Auden is undoubtedly the most interesting mind in the 'New Country' group, and it is not too great a claim for his powers to say that, if his 'Poems' had not appeared in 1930, none of the poets, including Spender and Day-Lewis, would be writing precisely as they are. (John Lehmann, "Some Revolutionary Trend in English Poetry 1930-1935," *International Literature*, No. 4 [April 1936], quoted in *W. H. Auden: The Critical Heritage*, ed. John Haffenden [Routledge & Kegan Paul, 1983], p. 176.)

- 14 福原麟太郎「英學時評」『英語青年』第84巻第12号(1941年3月15日)、380、および、福原麟太郎「一九三〇年代」『福原麟太郎著作集』第10巻(研究社、1969年)、379頁。後者の初出は、『三田文學』、1938年9月。ここで福原は1934年創刊の『英文學風景』の雰囲気について記しているのだが、ここでは、一般的な傾向として扱う。その他、拙稿「歴史の感覚をめぐって 戦前のT・S・エリオット理解の側面」同志社大学法学会『同志社法学』[200号記念論集 II]第39巻2・3号(1987年3月)、155以下、および、「西田幾多郎『伝統主義に就て』を読む 戦前のT・S・エリオット理解を背景として」『同志社大学英語英文学研究』第68号(1997年3月)、174を参照されたい。

- 15 同志社英文學會『主流』1936年6月創刊号「英吉利行動文學特輯」に扱われた記事は、巻頭の岡橋祐「ティ・エス・エリオットの最近の動向 文壇の現状と關聯して」について、つぎのとおり。当時の英文学研究における「行動主義文學」の一般的傾向を示すものとして重要である。なお、岡橋と兒玉は、『新領土』にエリオットやニュー・カンントリー派の評論の翻訳を掲載することになる。目次と実際の表題とが異なる場合は、後者による。\*は伏字を含むもの。

<論考> 兒玉實用「新しい英詩の動向とM・ロバーツの詩論」；多谷泰三「現代英文學の一性格 文學の政治性について」(注：Stephen Spender, *The Destructive Element* への言及を含む)；青井末治\*「C・D・ルイスの詩論」；太田藤一郎「S・スペンダー小論」(注：The *Destructive Element* への言及を含む)。

- <翻訳> S・スペンダー猪飼邦全譯「愛の歌 (S・スペンダー詩集より)」(注: テクストは Stephen Spender, “Never being, but always at the edge of Being”); C・イシャウッド原作田村良平譯「灣頭の或る夕景 (小説)」; S・スペンダー原作大住未造譯「二つの死 (小説)」; C・D・ルイス原作田草川宏譯\*「過渡期の詩 (批評)」; W・ナツトール原作桑田勉譯\*「プロレタリア文學の讀者 (批評)」(注: 末尾に“この論文は可成り反響を呼んだ。即ちロンドン・マーキュリ五月號、『プロレタリア文學の[未]來』による論文”とある)。
- 16 饒正太郎は「後記」『20世紀』第7号(1936年7月)に、“我等は行動主義文學に充分の興味をもつてゐる”としながら、“現在日本で云はれてゐる行動主義文學に対する修正的な立場にある”とする。なぜなら、“行動主義が一時的な花火であつたのは、日本の文學者たちの貧弱な社会性に対する認識にもよるが行動主義文學者側の集團に対する認識の欠乏”のためであり、より重要なことは、“彼等が同時代のジェネレーション乃至次のジェネレーションに対して働きかけなかつたこと”にあるからだ、と。参照、中野嘉一『前衛詩運動史の研究』、248頁。なお、饒の「青年の計畫(1)」は同号、48-49、ついで、「青年の計畫(2)」は、第8号(1936年10月) 58-59。
- 17 村野四郎「後記」『新領土』第1巻第1号(1937年5月) 77。のちの「後記」の引用も同頁。
- 18 村野四郎「詩的思考の遍歴」(金子光晴、小野十三郎、高橋新吉、北園克衛と共著)『現代詩の実験』(宝文館、1952年7月) 73-74頁。“次代のチャンピオン”は“饒正太郎、永田助太郎、大島博光、小林善雄達”とされる。
- 19 1954年の、村野四郎「一人の詩人が歩いた道」『現代詩読本』(河出書房、1954年2月)によれば、“この『新領土』には非常に若い詩人たちが加わり、今日の『荒地』グループの”詩人たちは、“彼らの詩誌『二十世紀』(マ)と共に、この『新領土』を彼らの詩的出発の踏切にした”とされる。ただし、鮎川もいうように、かれらは『20世紀』とは無関係であった。村野は“『二十世紀』という当時の青年モダニストたちの詩誌名は記憶していたけれど、それを誰がやっていたかを忘れてしまった”のである。参照、鮎川信夫「われわれの心にとって詩とは何であるか」『鮎川信夫著作集』第2巻(思潮社、1973年) 197-168頁。初出は、1954年7月。なお、本稿はこの版を使用し、新版の『鮎川信夫全集』(思潮社、1989年-)については必要に応じて参照する。
- 20 1939年8月以降、『新領土』寄稿者の氏名と住所が掲載されるが、饒の名前は無い。

上田保によれば、『詩と詩論』『文學』などの中心的な存在であった詩人の一部に新しい詩人が加わったのが『詩法』である。『詩法』になってからの新しい詩人に、饒正太郎、永田助太郎などがあり、毎号連載された饒の「一三七個の彫刻」には“時代の一種の虚無感を解放し、諷刺に精神で色づけながら、愉快そうに遊

泳している感”があった。しかし、『新領土』になってから、“饒正太郎の快活で威勢のよい作品は、その後すがたを消し”た、とされる。上田も『20世紀』の存在に触れていない。参照、上田保「『詩法』と『新領土』の詩人たち」伊東信吉他編『モダニズムの旗手たち』[現代詩鑑賞講座第三巻現代詩篇](角川書店、1969年)460、461、および、464頁。

また、木原孝一によれば、『詩法』では、“饒は若い世代の代表として旺盛な作品を示した”とされる。木原は、“<詩法>に参加した若い世代たちは<詩法>のみにあきたらず、自由な場を求めて”『20世紀』を創刊した、と位置づける。参照、木原孝一「昭和編(芸術派)」坪井繁治他編『現代詩はどう歩んできたか』(東京創元社、1955年)140および141頁。

なお、内堀宏によれば、北園克衛の『マダム・ブランシュ』が1934年夏に終刊となったのち、若手詩人たちは『椎の木』の若手による『カイエ』、早稲田の『エチュード』、そして桑原圭介の『手紙』を糾合して『20世紀』を創刊し、かれらはのちに『新領土』へと合流した、とされる。参照、澤正宏・和田博文編『日本のシュールレアリスム』(世界思想社、1995年)71頁。

- 21 上田保「後記」『新領土』第1巻第1号(1937年5月)77。さらに、上田保「後記」『新領土』第1巻第2号(1937年6月)133ではこうである。上田の立場は饒正太郎に近い。

現在、詩が直面してあるある種の不振を、その国際主義的潮流に歸因すると考へてある若干の人々があるが、これは逆立ちした論理と云はざるを得ない。反国際主義的逆流を培養してある現下の社会情勢に唯々諸々と追従してある國民主義こそ、却つて詩の不振に責任を負ふべき存在に外ならない。

- 22 春山行夫「後記」『新領土』第1巻第1号(1937年5月)78。
- 23 蠟山政道・河合榮治郎著『學生思想問題』(岩波書店、1932年5月)「序」2頁、および、「第一章」1頁。ここには、附録として、河合榮治郎「國家社會主義擡頭の由來」と「國家社會主義の批判」、蠟山正道「文明批判と思想問題」と「社会思想と家庭の立場」が収録されている。「序」によれば、“殊に河合の執筆にかゝる國家社會主義に関する二論文は、今回の調査會が専らマルキシズムに中心を置き、ファッシズムや右傾思想に間接に觸れるに止まつたので、我々の意見もこの方面には充分觸れなかつた、その缺陷を補ふのにこの論文が役立つと思はれる”からである。また、“河合に關する限り、社會問題その他に關する積極的意見は、特にその著『社會政策原理』(現代經濟學全集)に就いて参照あらんことを希望する”(4頁)と。
- 24 三木清「青年に就いて」『三木清全集』(岩波書店、1966-1986年)第13巻、223、228、および、231頁。初出は、「青年論」『日本評論』(1936年5月)。
- 25 三木清「學生に就いて」『三木清全集』第13巻、365、372、および、376頁。初出は、「學生の知能低下について」『文藝春秋』(1937年5月)。

26 世代に関連して、関連する詩人たちの出生年を括弧に記す。萩原朔太郎（1886年）；西脇順三郎（1894年）；村野四郎（1901年）；春山行夫（1902年）；近藤東（1904年）。すなわち、村野のいう“三人の共編集”者たちは、このとき30歳半ばであった。編輯兼発行者である上田保は少し遅れて1906年生まれ。そして、本稿の中心人物、鮎川信夫は1920年生まれである。イギリス詩人では、T. S. Eliot（1888年）；Michael Roberts（1902年）；Herbert Read（1893年）。オーデン・グループでは、C. Day-Lewis（1904年）；W. H. Auden（1907年）；Stephen Spender（1909年）。

『20世紀』グループの詩人たちについては、多くが戦死あるいは病没したため戦後に活躍することがなく、不明なところが多い。饒正太郎についても同様である。中野嘉一が『前衛詩運動史の研究』に、桑原圭介と小林善雄に拠って記すところによれば、饒は早稲田を卒業後、大蔵省に勤め、拓務省の官吏として台北に赴任した。『20世紀』のメンバーであった伊東昌子と結婚したが、戦時中病死した。『20世紀』のまえには、『カイエ』の編集兼発行人であった。他に、村野四郎、木原孝一などの証言から、『新領土』創刊時には20歳半ば、すなわち村野たち中堅詩人とおよそ10歳の年齢差であったろうと推測される。

27 鮎川信夫「戦後詩の拠点」『鮎川信夫著作集』第2巻、330頁。初出は、『鮎川信夫詩論集』（思潮社、1957年）。

28 村野四郎「後記」『新領土』第1巻第2号（1937年6月）132。そして、近藤東は同じ「後記」にこう記した。

純粋な思考による行動が、先入観念と衝突すれば、どちらかがもの笑ひの種にならねばならぬ。ただ後者は説明を必要としないが、前者には必要だ。詩人に缺けてゐるのは、この價値に於ての理論である。

29 『新領土』第48号の終刊後、佐藤房儀によれば、“その後用紙が残存したためパンフレット型で二冊追加発行し、その中に春山による四八号終刊宣言がなされている。さらに一七年一月まで六冊アオイ書房の編集で発行された”とされている。参照、佐藤房儀「新領土」日本近代文学館編『日本近代文学大事典』（講談社、1977-1978年）第VI巻、122頁。ただし、中野嘉一によれば、“四九号以降四ページの「地理」というリフレットをだし、「新領土」関係者の感想・随筆などを載せていたが、間もなく終刊した”（294頁）とされる。

また、上田保によれば、『新領土』は“昭和十六年六月号（通巻四十九号）をもって、ひとまず終わり、戦後の昭和三十二年七月号に復刊第一号が、再び通巻四十九号として出ている”が、“他にもうひとつ五十号から五十五号（昭和十六年十二月号）までという、別の形のもが存在している”とされる。また、“昭和十六年六月号（通巻四十九号）はわずか四頁の特集号”となった、とも。参照、上田保「『詩法』と『新領土』の詩人たち」『モダニズムの旗手たち』、463および467頁。ただし、中野嘉一によれば、復刊『新領土』は“わずか五号（通巻五三号）で終刊”した。詳細は、中野嘉一『前衛詩運動史の研究』、314-316頁を参照。



これらとは別に、春山行夫・上田敏雄・村野四郎・近藤東・永田助太郎編『新領土詩集』(山雅房、1941年4月)がある。ここに収録された饒正太郎の作品は、「青年の計畫」「青年の計畫(5)」の二点。鮎川の作品は「雑音の形態」。村野の作品は「サラリーマン週間」「近代修身 廣場に於いて」「別荘家族」である。

- 30 大岡信「戦争前夜のモダニズム」『大岡信著作集』(青土社、1977-1978年)第5巻、408-409頁。初出は、『ユリイカ』1960年12月。大岡は、このようにつづける。

これら作家の文章はすべて手際よく翻訳され、手際よく雑誌の中におさまっている。その意味で、一種の国際雑誌という感じが「新領土」には漂っていたのかもしれないし、昭和十二年から十六年までという時代にあっては、それが相当な意味をもっていたということも考えられないわけではない。(中略)しかしそれは、ごく少数の職業的ジャーナリストにとって重大であるにすぎない事柄だったのだ。しかもそれらの文章は、訳載されるという以外には、ほとんど何ひとつ「新領土」の詩人たちの作品にかかわりを持っていなかったといっている。それは当然のことで、これらの文章はすべて、人民戦線、スペイン内乱、ナチズムの急激な発展、シュルレアリスム運動の停滞、パリに形成された国際的なロスト・ジェネレーションの文学的環境の崩壊といった、三〇年代の欧州の政治的・社会的・文学的状況から直接生まれてきたものであり、またそうした状況を直接対象として書かれたものだったのだ。したがって、「新領土」の翻訳は、欧米文学の動きとの時間的な同時性はたっぷり持っていたが、質的な同時代性をまったく欠いていたという印象を与える(409-410頁)。

- 31 中野嘉一によれば、『セルパン』は“春山の独特な編集によって、一九三三 - 四年の小松清らの行動主義文学運動に協力し、ヒットラーの『わが闘争』や、オルダス・ハックスレイの新作小説などを紹介して、若い知識層の人気を集めていた文化雑誌であった。「新領土」と同時代の高いセンスをもつ雑誌であった。これは一九三七年ころからしだいに切迫する国際情勢への、一つの開かれた窓としての役割を果たした”(311頁)と。

- 32 饒正太郎「青年の計畫」『新領土』第1巻第1号(1937年5月) 60。あわせて、「青年の計畫」『新領土詩集』、103-4頁を参照。

- 33 三木清編『現代學生論』(矢の倉書店、1937年9月)。収録論文はつぎのとおり。新明正道「現代學生の性格」、瀧川幸辰「大學と教授と學生」、戸坂潤「現代學生論の諸要點」、宮澤俊義「學生と社會」、蟬山政道「諸君はどう進まれるか」、三木清「青年・學生に就いて」、谷川徹三「如何に生くべきか」。

- 34 本稿では「日華事変」とともに用いられた「日支事変」を採用する。「日中戦争」あるいは、「満州事変」以降終戦までを「15年戦争」として捉える視点はここでは採用しない。歴史的記述にはこの区切りは妥当だが、わたしたちは、時代に翻弄される人々の軌跡に関心があるからだ。「15年戦争」の捉え方については、鶴見俊輔『戦時期日本の精神史』(岩波書店、1991年) 6、11-13、および、172-173

頁。

- 35 上田保「後記」『新領土』第1巻第1号(1937年5月) 77。のちの引用も同頁。村野は春山・近藤・村野の“三人の共編集”というが、上田はたんなる名義上の“編集者兼発行人”ではなかったように思われる。
- 36 近藤東「詩への希望」『新領土』第1巻第1号(1937年5月) 12。
- 37 春山行夫「抒情詩の本質」『新領土』第1巻第1号(1937年5月) 5。以下の引用は、6、および、8-9。
- 38 中野嘉一『前衛詩運動史の研究』は、“環境を改造する”という饒正太郎と“環境の撰擇と適應とを發見”しようとする春山、この二人の詩人のあいだに、“なんとなく、ジェネレーションと個性の差異といったものが読みとれるのではないかと思う”(259頁)と記している。重要な指摘である。
- 39 ここに収められた三篇は、上田昊訳ボオル・ニザン「偏見なき一精神」、太田咲太郎訳ビエール・エルバル「『ソヴェト旅行記』を測定する」、上田保訳M・E・ラヴェヂ「ジイドの『ソヴェト旅行記』について」。上田によれば、“ラヴェヂのジイド批判はアメリカに於ける最初の反響として興味深い”もの、とされる(上田保「後記」同号、77)。なお、アメリカからの批判として、次号に外山定男訳マルカム・カウリイ「ジイドのソヴェト旅行記 『モスクワよりの退却』」『新領土』第1巻第2号(1937年6月) 125-126がつづく。
- 40 饒正太郎「アンドレ・ジイド」『新領土』第2巻第10号(1938年2月) 283-284は、つづいて刊行された『ソヴェト紀行修正』(1937年7月: 翻訳は同年10月)をも含めて、“ジイドの『ソヴェト旅行』の重大性はソヴェトに対するジイドの批判の問題よりも、今日の多くの知識人、殊に藝術家たちのカストロフイの多くをこの旅行記の中に含んであるといふことにあり”とし、“多くの人々はジイドの誠實を信じて来た。が注意しなければならないのは、審美主義者の誠實である”(原文のまま)という。また、“ソヴェトはジイドの見聞記より以上の混乱と困難と戦つてゐる。われわれが肯定したり否定したりしてゐることよりも、新しい歴史には長い時間が必要なのである”とも。この「アンドレ・ジイド」が前年11月の人民戦線事件以降に発表されたことに注意しなければならない。
- なお、マドリッドの「作家会議」開催中に登場した André Gide, *Retour de l'Urss* の衝撃については、Stephen Spender, *The Thirties and After: Poetry, Politics, People, 1930's-1970's* (Vintage Books, 1978), p. 19 に、1967年のかれの証言がある。
- 41 創刊号の構成は、「アンドレ・ジイド『ソヴェト旅行記』の批判」につづいて、<Poésie>として詩が掲載され、つづいて、<Revue>に海外の文芸情報が配される。ここには、*The New Country* の傾向をつく詩誌 *New Writing* の翻紹介記事のほか、上田保訳スティーヴン・スペンダー「オーデンの新著二つ オーデン、イシャーウッド共著劇詩『The Ascent of F6』とオーデン著詩集『Look, Stranger!』」(67-68)

がある。出典は記されていないが、Stephen Spender, “Fable and Reportage,” *The Left Review*, Vol. 2, No.14 (November 1936), [779]-782である。もちろん、左翼の立場を明確にした雑誌である。なお、オーデンとイシャーウッドの *The Dog beneath the Skin: or Where is Francis?* (1935) は、すでに、中野好夫訳「犬になつた男」『セルパン』第71号(1937年1月) 223-231に掲載されていた。

- 42 阿比留信訳 W・H・オーデン 「“ODE ”」『新領土』第1巻第1号(1937年5月)、14-17。出典は明らかにされていないが、1932年5月の *Orators* 『演説者たち / 雄辯家』の第三部「六つのオード」の冒頭である。

- 43 この一節は、1937年7月に再度登場する。安藤一郎訳セシル・デイ・ルイス「現代詩人の出発点」『新領土』第1巻第3号(1937年7月)、170ではつぎのとおり。

そして、冷たいヨーロッパの、秋の滅亡の真中に、  
クリストファは立つた、彼の顔は無知の前で  
畏縮し皺寄つて 「英國人に告げよ、」彼は戦のいた、  
「人間は精霊である。」と

なお、末尾に“(『詩への希望』第七章より)”とあるが、第六章の誤り。

- 44 北村常夫訳スティーヴン・スペンダー「詩論 Fragments」『新領土』第1巻第1号(1937年5月)、14-20のうち、19-20。出典は記されていないが、Stephen Spender, *The Destructive Element: A Study of Modern Writers and Beliefs* (Jonathan Cape, 1935)は3月の刊行、アメリカではHoughton Mifflin Companyから翌1936年。

“今日イエーツは、「われ立ちて行かなん、インニスフリーへ」などとは言はぬだらう”にはじまる一節(18)、“エリオットの文體は、彼の詩の必要によつて支配されてゐるので、明かに詩を含んでゐない”にはじまる一節(20)、はそれぞれ“Yeats as a Realist”と“Poetry and Pity”から採用されるほか、四つの断片を除いて、“T. S. Eliot in his Poetry”と“T. S. Eliot in his Criticism”が出典である。

ロレンスに関する断片、“ロレンスは性を、社會革命を轉回させる樞軸點と看做した。男女の會合が一定の社會会的背景の缺如の代用になつた。性的關係は、人間が自己の魂と正直とを發見する手段方法であつた”(19)の出典は、Stephen Spender, “D. H. Lawrence: *Phoenix*,” *The Left Review*, Vol. 2, No. 16 (January 1937), 903である。

その他、オーデンとイシャーウッドとの関連でエリオットの『大寺院の殺人』を論ずる三つ断片(18-19)については、出典はなお未詳。*Murder in the Cathedral* (1935年5月)は *The Destructive Elements* 刊行後の作品でありここには扱われていなかったから、北村常夫は新しい資料を追加したのである。

- 45 春山行夫訳 C・デイ・ルイス「詩に對する希望」『新領土』第1巻第1号(1937年5月) 20-23。出典は記されていないが、C. Day Lewis, *A Hope for Poetry* (Oxford: B. Blackwell, 1934)であり、他に、C. Day Lewis, *Collected Poems 1929-1933 and A*

*Hope for Poetry* (New York: Random House, c1935)がある。なお、のちに、C. Day Lewis, *A Hope for Poetry* [Reprint with a postscript] (B. Blackwell, 1939)がある。

なお、『新領土』では、“C・D・ルイス”が多く用いられるが、正確には“C・デイ＝ルイス”である。本稿では“デイ・ルイス”と表記する。警察がデイ・ルイスを危険人物と見なしていたことは、鮎川信夫「詩的青春が遺したもの」『鮎川信夫著作集』第8巻、271頁を参照。初出は『現代詩手帖』（1974年2-8月）。

46 W. H. Auden, “The Orators: An English Study,” in *The English Auden: Poems, Essays and Dramatic Writings, 1927-1939* by W. H. Auden, ed. Edward Mendelson (Faber, 1977), p. 94. 草稿の日付は“August-November 1931”である。なお、*The Orators: An English Study* はスペンダーに捧げられた。デイ・ルイスと同様、かれもまた、伯父との対面の場面を、“The Airman, Politics and Psycho-Analysis” (Chapter XV; Part Three) in *The Destructive Element: A Study of Modern Writers and Beliefs* (p. 267) に引用している。

47 以上、主として斎藤茂太『飛行機とともに 羽ばたき機からSSTまで』（中公新書、1972年）を参照。

48 三國一郎『戦中用語集』（岩波新書、1985年）52頁および80頁。

49 笹沢清明「ノイエ・ザハリヒカイト文學」『詩と詩論』第8輯(1930年6月)、214-221、そして、武田忠哉「二つの飛行詩（ベルト・ブレヒト『リンドバーク』、ヨアーヒム・リングルナツツ『飛行思想』の紹介）」『詩・現実』第1冊(1930年5月)；同「ドイツ飛行詩の展望」『詩・現実』第5冊(1931年6月)、196-210を参照。

50 堀口大學「翻譯の苦心を語る『夜間飛行』を翻譯して」『セルパン』第45号(1934年11月)、巻末<ピチヨン>欄。このころ、春山行夫は『セルパン』の「文藝時評」を担当しており、編輯者となった第47号(1935年1月)から特輯「世界名作テエマ小説」を組み、そのひとつに、北村小松の抄訳アントワヌ・サン・テグジュペリ(マ)『南方飛行便』(147-153)がある。翌月には、小松清の抄訳アンドレ・マルロオ「人間的条件」(141-147)、伊東昌子「南方飛行便」『20世紀』第7号(1936年7月)、43、また、饒正太郎「飛行日記」『セルパン』第71号(1937年1月)、12-13は、サン＝テグジュペリの“行動主義”を念頭においたもの。

51 堀口大學「譯者の言葉」『南方飛行便』(第一書房、1935年5月) 12頁。巻末奥付裏「『夜間飛行』に對する世評」の、阿部知二、板垣直子、舟橋聖一、中河與一のコメントは当時の衝撃をうかがわせる。『堀口大學全集』(小澤書店、1981-1988年)補巻1、758-759にも所収。

52 『詩法』および『20世紀』におけるC・デイ・ルイスとオーデン・グループの紹介記事はつぎのとおり。『詩法』では、

北村常夫「現代詩人の問題 デエイ・ルイスの『詩に對する希望』」: 1934年11月。33-40頁にわたって紹介されたC. Day Lewis, *A Hope for Poetry* (Oxford: B. Blackwell) は、この年9月の出版であったことに注意。

上田保訳D・デイ・ルイス「詩と思想」:1935年4月、5月。

岡山東訳G・W・ストニア「デイ・ルイス論」:1935年5月。

饒正太郎訳スティヴン・スペンダ「詩と憐愍」:1935年7月。出典は *The Destructive Element* の第12章“Poetry and Pity”の訳である。この書はこの年3月に出版されたばかりであった。

『20世紀』では、

酒井正平・饒正太郎訳W・H・オーデン「死の舞踏」:1934年12月;1935年2月;4月;7月。出典 W. H. Auden, *The Dance of Death* (Faber and Faber) は、1933年11月の出版。これは、アメリカ版では、*Poems* (Random House) に収録されたが、出版は1934年9月。

奈切哲夫訳スティヴン・スペンダー「ヴイナ」:1935年10月;1936年1月。出典 Stephen Spender, *Vienna* (Random House) は、1934年末の出版。

菊島常二訳C・D・ルイス「作家とモラル」:1936年10月。

菊島常二訳C・D・ルイス「詩に就いて」:1936年12月。

堺謙三訳マイケル・ロバーツ「T・S・エリオットの詩」:1936年10月。

堺謙三訳ハーバート・リード「現代詩に於ける形式」:1935年2月。

53 上田保訳T・S・エリオット「スペイン革命と政治思想の頹廢」『セルパン』第76号(1937年5月) 86-87。なお、これは無署名だが、上田保『ヨーロッパ文学入門』(東京:慶応通信、1962年)の「年譜」によって確認できる。以降、上田訳と考えられるものは、すべてこれに拠る。

54 拙稿「T・S・エリオットと1930年代 ミュンヘン協定まで」、49-51を参照。

55 坂上康博『権力装置としてのスポーツ 帝国日本の国家戦略』(講談社、1998年) 208頁以下。なお、ベルリン・オリンピックの映画『民族の祭典』がわが国で解禁され、安岡章太郎がそれを見たのが1941年であったことは、同書、241-242頁。

56 福島鑄郎『戦後雑誌の周辺』(筑摩書房、1987年) 309頁。

57 詳細は、拙稿「歴史の感覚をめぐる 戦前のT・S・エリオット理解の側面」上、159-160を参照。

58 堺謙三訳C・D・ルイス「ハックスレイ氏への公開質問状」『新領土』第1巻第2号(1937年6月) 96-102。出典は末尾に示されているが、正確には、C. Day Lewis, *We're Not Going to Do Nothing: A Reply to Mr. Aldous Huxley's Pamphlet "What Are You Going to Do About It?"* (The Left Review, Nov. 1936)、同月、C. Day Lewis, "Labour and Fascism," *The Left Review*, Vol. 2, No.14 (Nov. 1936), 731-774に掲載。Aldous Huxley, *What Are You Going to Do About It?* は、1936年4月、ドイツの再軍備とラインラントへの進駐直後、すなわち、スペイン内乱以前に書かれたもの。同パンフレットへの反論は他に、Stephen Spender, "Concerning Aldous Huxley's 'Constructive Peace,'" *The Left Review*, Vol. 2, No. 11 (August 1936), 539-541がある。

59 福島鑄郎『戦後雑誌の周辺』、345頁。戦前、鮎川の父は『村を護れ』などの雑

誌を出しており、その編集を手伝い、また原稿も書かされた。しかし、かれが中学生のころ（1933年4月-1937年3月）でさえ、“当時でも検閲はきびしいもので、注意されたり削除を命ぜられたりする”ことがよくあり、“時々警官が配達してくる「記事差止」の通知書をのぞくのは、スリリングなたのしみの一つで、この世の裏側で何が起っているかを空想する手がかりを与えてくれた”と。参照、鮎川信夫「小自伝」『鮎川信夫著作集』第8巻、295-296頁。初出は、1967年12月。また、1938年の鮎川の日記にも、“昨日脱稿した創作の原稿を父に渡す”（1938年2月20日）“‘灯籠物語’第一回分脱稿、父に渡す”（3月28日）父の雑誌“向上之友の編輯を終へ”た（4月25日）“「向上之友」6月号の編輯をし終へて、父に渡す”（5月24日）など、と記されている。

- 60 [編集付記]小松清訳ジイド『ソヴェト旅行記』（岩波文庫、1992年）212頁。発禁により初版から削除された詩は、180頁以下。
- 61 上田保訳T・S・エリオット「政治と知識階級」『新領土』第1巻第4号（1937年8月）258-262。出典は、T. S. Eliot, “A Commentary,” *The Criterion*, XVI, No. 64 (April, 1937), 474以下。
- 62 たとえば、深瀬基寛『現代の英文學』[アテネ文庫]（弘文堂、1951年8月）は、第1章を「文學と政治と戦争 三〇年代の詩」とした。鮎川信夫はのちにこの書を援用する。
- 63 近藤東「後記」『新領土』第2巻第7号（1937年11月）75。春山の「後記」も同頁。
- 64 村野四郎『新領土』第2巻第7号（1937年11月）75。村野はさらにいう。“このことは僕らの小林善雄が他誌でも明言した通り”であり、“『新領土』がそれと特殊な関係に限定されて、批評されるといふことは、我々にとっては甚しい迷惑である”と。
- 65 村野四郎「近代修身」『新領土』第2巻第7号（1937年11月）56。冒頭の“君らは手で歩くべきだ”は、のちに、“君らは手で歩け”に変更。
- 66 林茂「太平洋戦争」『日本の歴史』（中公文庫、1974年）第25巻、89-91頁。
- 67 以下を参照した。ラジオ体操50周年記念史編集委員会編『新しい朝が来た ラジオ体操50年の歩み』（簡易保険加入者協会、1979年）；高橋秀実『素晴らしきラジオ体操』（小学館、1998年）；<http://www.kampo.mpt.go.jp/event/radio>
- 68 黒田勇「時間と身体の近代化 ラジオ体操をめぐって」京都大学新聞社編『口笛と軍靴 天皇制ファシズムの相貌』（社会評論社、1985年）183-184頁。なお、1931年の主催団体は、東京府、東京市、簡易保険局、東京通信局、東京中央放送局、在郷軍人会、青年団体連合会、少年団（183頁）。
- 69 高橋秀実『素晴らしきラジオ体操』、138頁。なお、1937年11月1日を例にとれば、ラジオ体操は、朝6時30分から30分、ついで、7時51分から、さらに、8時50分から放送された。ただし、これはむしろ例外であって、この頃は6時からの30分に

加えて7時20分から放送されるのが標準であった。参照、「ラジオ体操放送時間の推移表」『新しい朝が来た』、254頁。

- 70 村野四郎「現代に於ける詩の意義」『新領土』第2巻第9号(1938年1月) 225。  
 71 村野四郎「近代修身 廣場に於いて」『新領土』第2巻第9号(1938年1月) 224。  
 72 村野四郎「近代修身 廣場に於いて」『新領土詩集』、297-298頁。『新領土』創刊号の「サラリーマン週間 陽気なコーラス」には、若干の手直しがされているが、最終の3行を、“愛人は彼の手を執つて / ……に笑はれるたび毎に / 青年の肩のところ赤くなつた”と変更。“……”は“兵士”であった。  
 73 「ラジオ体操放送時間の推移表」『新しい朝が来た』、254頁。  
 74 村野四郎「近代修身」『新領土』第3巻第13号(1938年5月) 25。さらに、これ以前の、村野四郎「近代修身」『日本詩壇』第6巻第1号(1938年1月) 22では、こうである。

太陽は見なれた果物である  
 けたたましいラジオ体操は  
 君たちを世界の中へおひ出す  
 このうるさい雄鶏によつて  
 君たちは肉體をきたへよ

<六行略>

はり廻らされた緻密な電線をくぐつて  
 踽いてゐる旅客機のために笑ひ  
 空中にある  
 修線工夫を信じよ  
 そして精神の調整のために  
 それを斷ちえない人々のために嘆け

<以下略>

この翌月、鮎川信夫の「落葉」『日本詩壇』第6巻第2号(1938年2月)、94が投稿詩欄に掲載されている。かれは、『新領土』参加以前に、この詩誌で村野の作品を読んでいたはずだ。

- 75 岡橋祐「ティ・エス・エリオット」『新領土』第2巻第9号(1938年1月) 230。

## Nobuo Ayukawa and *Shin-Ryodo* (1)

Akira NAKAI

Key words: Japanese modernist movement in the 1930's, Nobuo AYUKAWA, *Shin-Ryodo* (Poetry Journal)

The modernist movement in Japanese poetry began with the quarterly journal, “*Shi-to-Shiron (Poetry and Criticism)*” (1928-1931) followed by “*Bungaku (Literature)*” (1932-1933), calling for an intellectual approach to poetry rather than mere lyrical self-expression. Its original core members inaugurated “*Shiho (Art of Poetry)*” in August 1934 along with newly enrolled younger poets; some of them, in addition to contributing to it, set out “*Niju-Seiki (20th Century)*” in December of the same year, arguing for the contemporary quality in poetry.

In May 1937, “*Shiho*” and “*Niju-Seiki*” merged together to publish “*Shin-Ryodo (New Country)*,” the members of which comprised the leading poets in their mid-thirties and the younger mostly in their twenties, and stood as the only forum for modernist poetry, coming to its close in May 1941. The period of publication coincides with that period from the “Marco Polo Bridge Incident” in June 1937, which led to the Sino-Japanese War, to the “Pacific War” declared in December 1941.

“*Shin-Ryodo*” was named after its English counterpart published in 1933, a collection of poetry and literary criticism by Day-Lewis, Spender and Auden, among others. Their communistic approach to poetry, however, was a theme to be discussed discreetly, since the political pressure was weighing heavily on the terms such as “communism,” “socialism,” and even “democracy.” And yet its literary impact was kept alive as a part of “*kodo-shugi-bungaku* (activism in literature),” coined after the French “*humanisme de l'action*” in 1934, and remained in currency for sometime among literary



circles.

Thus, “*Shin-Ryodo*” shared the social concern with new English poets from the “New Country/Auden Group,” but the scope for “activism” in 1937 was left only for the active awareness of a society in a state of flux, and poetry meant its domain where the corresponding sensibility was cultivated. It should be noted, however, that there was a hidden gap, at the very outset, between the “*école*” of the original intellectual modernists and the urge for contemporary poetry on the part of the younger poets. All the same, circumscribed by pressing censorship other than the militarist government, the poets were, more or less, forced to be committed to the age. All that mattered was their “sincerity,” but some began, and continued during the wartime “involuntarily” as they said later, to write for the establishment.

In February 1938, Nobuo Ayukawa (1920-1986), from yet another young generation, became a member of “*Shin-Ryodo*,” and was to witness in his formative years its gradual deterioration and the final defeat of prewar modernism. In the postwar period, Ayukawa, as a leading poet and literary critic, endeavoured to fill up the vacuum in the modernist movement brought by the nationalistic rage and also by the poets themselves. When he found the poets who had once written praising the war in an anthology (1954) of protest poems against the American testing of the hydrogen bomb, Ayukawa began his most fierce battle against them, demanding that if they were sincere in writing for peace, then they should also have been sincere and must have written “voluntarily” for the war, and that there was no excuse for defending their poems saying that they had been forced.

The papers that follow the present three chapters will examine Ayukawa’s formative period in the context of “*Shin-Ryodo*” to demonstrate that the literary weapon in his postwar years was being prepared through the translated poems and criticism, particularly by T. S. Eliot and the Auden Group, which the journal itself introduced to him. What he learned was that

without the active sense of the time poets live in, their poetry becomes a mere display of intellectual feats.